

LingvoオクトM+

2024年9月9日

(月曜日)

姫路市民会館四階第四会議室

9月例会

○詩

○川柳

○エッセイ・小説

Vol. 23



Vol. 2 3

9月9日（月）姫路市民会館

読書会講師：諸井学

次回10月7日（月曜日）

会場：姫路アイメッセ予定

読書会：講師未定

LingvoオクトM+の

参加は自由です。斬新な作品を募集します。

世話人高谷和幸

〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24

e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

10月の読書会をしていただく方を探しています。自薦、他薦も歓迎します。

目

千田草介

サイコロが六の目を剥いてオパビニアより一つ目が多いと自慢をたれるとオニヤンマが飛んできて俺の目は二万個あるぞと胸を張るもそんなに目が多くないと対象を捉えられぬのかと一つ目小僧と一本唐傘とルドンの一つ目の巨人と東大医学部地下のホルマリン漬け単眼症の赤児の標本がケラケラガラガラと嗤う。何をする人だったか百目鬼恭三郎という名の泉下の人も嗤うだろうか。

爪を切る

吉田ふみゑ

薬指の爪は伸びると割れる
橋杭岩みたいになると
いろんなものに引つかかる
さっさと切ってしまおうと
爪切りを持つ

「やめとき、夜やで」

母の声が聞こえた

姉の声も聞こえてきた

「夜に爪を切ったら親不孝や」

薬指一本だけ、と思って切り始めたけど

十本の指の爪を全部切った

足の指の爪も切った

切っていると母の声も

姉の声も聞こえなくなった

階段

浜田多代子

二段飛びで走る学生
階段を軽々

息も切らず上がったところ
そこには電車が止まっていた

階段に二人が立っている

最初はグウ

じゃんけんほい

チ・ヨ・コ・レ・イ・ト

太古に彫られたという摩崖仏
仏様の階段がある

天に上る仏様の歩かれる道を
村人は作ったという

白い建物の裏に
長い堤があり
ところどころ草の生えた
階段がある

堤は遊びの場
子供の弾む声が聞こえる
いいなあ
声は空を駆け上がっていく

草いきれの石の階段を上がる
ひい ふう みい
階段は二一段
齡八三才

人は心の中に階段を持っている
階段を上がると新しい自分に出会えるような気分になる
いま 夏の真っ盛り

「あけがたにくる人」

詩のプロジェクトンマツピング

高谷和幸

「どうしたことか目も足も野分めいた風に舞い、夜道に迷っていたらしい。何も見えない漆黒の闇だが、住み慣れた地域なので、見えなくても見せるものあり。土壁や板塀で囲まれた暗がりから出てきた者とすれ違う。あの影ぼうしは、あれは誰かと、そばたてたおまえの耳を洗っておいで。ほら「今日日がらもよいほどに　えべすもいさめてまいらんしよや」と言いながら暁鳥が東の空へ、一条通の「戻り橋」へと飛んでいく。死者復活の道を祝って多くの人が服を脱いで路面を覆い、その上を棕櫚の小枝で清めた道を「ヌル」が来るのを待っていた。まだ若かった彼女は「て

「てっぼうぼう」と声の方へと、記憶の森の
空き地に忘れてきた人を待っていた。彼女が
抱いていたバスケットは「空亡」となり、時
空を超えて煤払いの古道具に交じり、「また
逢うぞうれし また逢うぞうれしき戻り橋」
と物ども、事ども唱和する。やぶれ太鼓を打
ち鳴らすもの、くねくねと傘や下駄を振り回
すもので大賑わい、しかしその割にはどこか
陰気な行列ができあがる。忘れられた恨みが
鬼になり、おまえの血の一滴まで食いつくす
魂胆なり。さてさておまえならどうする。あ
けがたにくる人、闇と黒雲 炎をまとった巨
大な球体は「ヌル」と呼ばれ、あの時、夜道
ですれ違った「わし」が「おまえ」になっ
たか。

8月25日 たつの演劇祭eta 猿楽朗読詩より

アメリカ南部人と日本人

モス堀渕敬子

私は、1989年5月から2012年6月までの23年間、アメリカにあるノースカロライナ州に住んでいた。そこは夫の故郷である。そこで一番に思ったことは、日本は太平洋戦争に負けて自信もプライドも失ってしまったけれど南部人はプライドを失っていないことだ。今でも北部人は、“Damn Yankee”（くそつたれヤンキー）と呼ばれて嫌われている。南部一の都会アトランタのあるジョージア州と鹿児島は姉妹盟約を結んでいる。片や南北戦争、片や西南戦争と同じころの内戦でどちらも負けているからだ。

私の母は昨年の9月に亡くなったが、看護師兼助産師だった。母は従軍看護婦になってお国のために尽くしたかったが、日本が負けたので助産師学校にも行かなかったという。母にとっては50年たとうが60年たとうが、日本は敗戦国だという。アメリカ南部ミシシッピ州出身の作家ウィリアム フォークナーは来日した際、ヤンキーと戦争して負けたということと南部と日本の運命は似ていると、言ったそうだ。

夫によると、南部人と日本人の性格も似ているという。どちらも保守的で、本音と建前があるというのだ。

1999年のワールドシリーズはニューヨークヤンキース対アトランタブレーブス
で大いに盛り上がった。
南北戦争はまだ続いているかのようだ。

瀬川健二郎

——たとえば君が傷ついてくじけそうになったときは必ずぼくがそばにいて支えてあげるよ。その肩を♪「かおり先生って、すごいのよ」亡き妻は、よくつぶやいていた。先生は、音楽大学で妻の後輩になる。わたしが妻の強引な勧誘に折れ、PTAコーラスを始めたころ。中学校と二つの小学校からなる三校合同合唱の指揮を、かおり先生がされる。しなやかな身体から、音楽をする楽しさが溢れ出る。以来二十年——。コロナ禍で、もはや消滅かと思いきや、不死鳥のように復活された。その新春コンサート。一月十三日。木枯らし舞う寒さのなか、会場は観客でいっぱい。かおり先生が手塩にかけて育てられたコーラスグループのメンバー。ほとんどが高齢の女性かな。地域の人もちらほら。ブラックベリーのプロ演奏に聴き入る。そして、身体をほぐしていくリズム体操。芯からポカポカと温まる。途中でティータム。年若い人が、ササッと飲み物とお菓子を配る。なんの気遣いもない軽やかさ。先生と一緒に童謡を歌う。音楽で人をつなぐ光景に、目を見張る。われわれ「歌う♪[Takaoka]」も出演する。聴衆は混声合唱が珍しいのか、微動だにしない。高岡ボーイズの存在感が増す。トリは、BELIEVE。元旦に起こった能登半島地震。今の日本の哀しい状況に思いを馳せ励ましを送る。

※一月三十一日の練習で、先生は冒頭、しみじみと新春コンサートのお礼をいわ

る。当日の感触とその後の各グループの感想を聞いて確信をもたれたのだろう。「これが、わたしのやりたかった音楽です」万感の思いが胸に迫る。姫路でできるのに、四十年。まさに人生のすべてを捧げたといって過言でない。「教育の理想郷の顕現」。学校に勤めた者にも憧れこそあれ、必ず早々に夢破れる。これを實現したのは、わたしの知る限り、かおり先生と私塾を立ち上げられた三木英一先生のお二人ではないか。何より、先生が嫁ぎ先の公民館でされたことを評価したい。先生の実家近くなら、もっと早く十〜十五年で出来るかも。嫁ぎ先はゼロからの出発だったはず。いや抵抗の方が大きいのでは。「いろんなことがあるけど、最後は自分を信じてステージに立つのよ。もちろん伴奏の方も、聴いてくださるお客さんも……」

——いま未来のとびらを開けるとき

悲しみや苦しみが

いつの日か 喜びにかわるだろう

I believe in future

花の名のほうへ

海埜今日子

しらない歌が、声をしじまだ。庭に咲くのは、ほとんど、昔に、しまったものばかり。香りが記憶をつれてやってくるみたい、それだけではなかったが。岸辺で、風が髪、後押しするように、ふきぬけた。名前をおぼえて。そしたら、いるから。ツルボの、ブラシのような花たちも、なびいてみえた。フジバカマ、アキノタムラソウ、子どもの頃から、なじみがあるの。去年種をまいたワレモコウ、今年はようやく花を。しらない虫も秋に鳴け。そう、名のわからない、かれらは、どこか遠いのです。鐘のようなツリガネニンジンの花がゆれる。だって、しらないと、素通りしてしまうじゃない。思い入れがあるんだね、そういつてくれた人も、岸の向こうで。花の名を、楽しげにおぼえる子ども、いつくしんで、植物の好きな、とうに死んだ父、それだけではなかったが。香りのように、たなびく声です。どこかで気づいていたのだった。虫のすだく、おだやかな風よ。それらは長く続かないと。ぼうっと、とる、あれはキツネノカミソリ。林でひっそりと、ギンリョウソウの、半分透けた、こわい白さが、木

陰をてらす。あたらしい名も、あれから、すこし、おぼえたんだ。林を抜けると、ミズヒキが金色と赤、にぎやかに初秋をささやいて。春よりも、去りゆく秋のほうに、夕焼けみたい、はなやかで、切ないね。名のわからない、香りが日々だ。アキノキリンソウ、ノハラアザミ、そっと花束にして、河原まで、すぐだったから、明日も、その名をながすのだった。しっぺいる虫へ、空でひびけ。髪が筆のように文字をたくす。庭のヒガンバナが、ようやく花芽を出してくれた。あたらしい名で、だれかも、いつて、ね。夕日の真つ赤が、いつかを咲いた。やっとおぼえてくれたんだ。わたしもどこかで、呼ばれるのだろうか。うめた声の匂いがする。

「（その花を所有したい、と思った。晩夏の夕、路地に白い漏斗形の花が数十いっせいに咲き立ち、甘酸っぱい匂いがあたりを満ちた。けれど花の名を知らない。」（「命名」根本明『未明、観覧車』より）

十七人の、初夏

情野千里

初夏ういかと呼ばれる季節には、詩や小説や川柳の情念や情欲の湿気にまみれた言の葉たちをまとめて養生する祭りをせねばならない。書きなぐり編み散らし目を落として型破りとなったことくさ言草を、丁寧に慎重にはどいてさばいてひと摺みずつ束ねて干さねばならない。十七梱もの言の葉を梁に吊るし終わると、束ねるために用意した十七梱のしね糸は空になり、夏も、祭りも終わりになった。

本番前の足袋の白黒どっちでも良い

わが孫ながら薬缶が傾くほど綺麗

「そんなことは出来ん！」ほんまに言うた

ブリッジしたまま四足歩行のおなご武士

カタツブリがいてカタツモリが即興的

女優らしくないかもウイカも吉高も

「三蟹念仏」ではハナサキガニだった

長崎の訛りなつかし偽情人

他人ではない男の真っ赤な舌の裏

浮き河竹が袱紗たばさみ「ホホ」と言う

この子どもこの子どもこの殿のお子

四十娘も五十娘もわたしの娘

2024年9月9日（月） LINGVOオクトM+9月例会のために

読書の楽しみ2024. 9. 15

於・勝原公民館

諸井 学

ただいまご紹介にあずかりました諸井学です。日ごろは電気製品を商って糊口をしのいでいる電気屋です。その電気屋が小説を書いているのです。いわゆる「二足のわらじ」と言うのでしょうか。以前FMゲンキという姫路の番組に呼ばれたとき、MCの理恵ちゃんに「二足のわらじ」の話をして両面印刷の名刺を渡しますと、たいへん喜ばれましてネットにまで挙げていただきました。その名刺とというのが、電気屋ですからまず屋号の伏見電機商会と入れて、その下に本名の伏見利憲と入れます。住所や電話は従来通りで、その左横にわらじの写真を入れました。名刺を渡すとみんな「これ何？」と訊ねますので、「わらじです」と答えます。裏返すとまた同じ写真があつて、諸井学と書いています。相手は不思議そうに名刺を裏返して見ますので、「二足のわらじを履いています」と言うと、相手は合点して笑い出します。この度皆さんの前で話をしてくれと依頼を受けまして、「さて、何の話がいいかな？」などとテレビを観ながら考えていましたら、「ベケットはあかんで！」と突然洗い物をしていたつれあいが叫ぶんです。以心伝心というか、先ほど電話を切つてからテレビの前でポーツとしていたわたしを見て、テレビを観ているようで観ていない、それが分かるんですねえ、うちの古女房殿には。ベケットとは、サミュエル・ベケットというアイルランドの劇作家・小説家です。一九六九年にノーベル文学賞を受賞しました。わが国の川端康成がもらった次の年でした。とにかく訳の分からん小説を書く人で、そんな人の小難しい話をしたらあかん、ということです、古女房殿は。気遣

つてくれているんですね。でも、もう話し始めてしまいましたけどね。しかし、どうしてもベケットの話をしなければならぬんです。というのは、わたしのペンネームに関わる話だから。わたしのペンネームの「諸井学」というのは、ベケットの小説『モロイ』に由来しているんです。即ち、『モロイ』を学んだ、というわけ。洒落にもならない話なんですけど・・・、お粗末で・・・。

そこで何の話がいいか？ いろいろ思案しました結果、本を読む「きっかけ」などどうかと思いました。ひとに薦められて読む、或いは課題図書、また本屋で興味を惹かれて手に取る、読み終わった本の参考書欄から芋づる式に読み進んで行く、そして映画やテレビを観てから原作を読む。昔コーシヤルのキャッチコピーでありました。「読んでから見ると、見てから読むか」、角川映画でした。しかし、この「きっかけ」は一冊の本を読むきっかけです。わたしがいうのは、そもそも本を読むようになった「きっかけ」です。そんなたいそうなことやない、と言われると思いますが、わたしの場合、たいそうなのです。そもそもわたしは本を読まない人間でした。こういえば、現在のわたしをご存知の方たちは、「また何の冗談を・・・」と思われるかもしれませんが、事実です。わたしは十八歳まで、一般的にいわれる読書はしませんでした。もちろん教科書や参考書のたぐいは読んでいます。「日本文学全集」や「世界文学全集」に採られているような本を読んでいないということです。そして、読んでいたのはマンガ雑誌、「少年」「少年画報」「少年マガジン」「サンデー」「ジャンプ」などです。『鉄腕アトム』『鉄人28号』『赤胴鈴之助』『あしたのジョー』『男一匹ガキ大将』など懐かしい作品を思い出します。しかし、この頃にいわゆる本は読んでいないのです。まずわが家には本がありませんでした。小説と言いつてもいいのですが、両親は電気屋を商っていたので商売に忙しく、わたしは祖母に育てられました。家事を賄う祖母といっしょに寝起きして、中学まで生活を共にしていたのです。祖母は明治生まれ、七歳で奉公に出され、学校へは行っていません。学校の

勉強というものを知らない。勉強せよ、などと言われたことがないへん。幸せな少年期を過ごしました。自ら求めて本を読むようになったのは大学に入学してからです。もちろん「きつかけ」があります。いよいよわたしがいうところの「本を読み始めたきつかけ」です。それが無謀なことに、小説を書きたいと思ったからです。それも小説など読んだこともないわたしが、です。どんな小説を書こうとしたのかというと、自らの失恋物語です。よくあるパターンですね。でも真剣でした。恋を失ってはずたになつた心をもて余し、表現しようとしたのでしよう。どんな話か話すとのろけ話になつてしまいますので止めておきます。

わたしは稚拙な物語を創作ノートに書きながら小説を読みました。四年間で六百冊読んだ濫読の始まりです。最初は日本文学全集の川端、芥川、漱石、鵑外、太宰、三島などを読んだのですが、漱石の『こころ』を読んでから深く影響を受け、後期の作品『彼岸過迄』や『行人』『明暗』などを次々と読みました。もちろんその間にも手当たり次第に本を読んでおり、外国文学ではアンドレ・ジイドの『地の糧』に感銘し、こんな文章を書きたいと、丹念にノートに写したりしました。後日談になるのですが、その文章は今日出海の訳文であつたのに思い至つたのは、ずいぶん後のことでした。ジイドの作品は手に入る限り読みました。大学一年の夏休み、わたしは腰痛で二カ月間入院しましたので、その間、『地の糧』を皮切りに『一粒の麦もし死なずば』『狭き門』『背徳者』『贖金づくり』などおよそ十五冊、読み終えるたびに姫路駅前の新興書房（懐かしい名前です）へ行つて次々と買ったのです。今なら棚にある本をすべて買うのですが、大人買いというそうです。当時は学生の小遣い銭でやりくりしていたので一冊ずつ買いました。そして読み進むうちに、文学とは作文のような稚拙な恋心を描くものではなく、人間の心のありようをきめ細かく、深く描くものであると知つたのです。たくさん本を読んでいくにしたがつて、文学の本質をおぼろげながら捉えられるようになったのでしようか。

わたしは小説を書くために本を読んだのですが、ではどんなものを書いていたかというところ、これがまたお粗末限らないものでした。数学や理科は得意でしたが、国語はまったく苦手な生徒でした。作文や読書感想文を書けと言われると憂鬱で、宿題が出来ずに登校拒否まがいのことをしました。ところが恋とは恐ろしいもので、そんな人間に小説を書こうとさせたのでした。

ではどんな小説を書こうとしたのでしょうか。残っている四十四冊の「創作ノート」から探っていくところだと思います。じぶんの「創作ノート」ですが、いまとなつては興味津々です。最初の頃は先に紹介したジツドの作品の文章を写したり、或いは散文詩のようなものを書いたりしていました。それが大卒三年の後期にある小説を着想しているのです。ちょうど三島由紀夫が割腹自殺した後です。ちよつと調べてみましたが、事件は昭和四十五年（一九七〇）十一月二十五日でしたので、ノートの内容はそれ以降のものです。断わっておきますが、わたしの文学は三島由紀夫とは何の関係もありません。

その時わたしが着想した小説の題は『分身』といいます。内容はというと、ある朝目が覚めたら自分が身体を失つて透明人間になつていた。家の中は別に変化はなく、食卓は片付けられ、母は家事に勤しんでいる。電車に乗って大学へ行くとそこには別の自分が授業を受けていて、厚顔無恥に振舞う姿を発見する。どこかで読んだような話ですねえ。カフカやドストエーフスキイ、ポーの作品を混ぜ合わせ、カミュとサルトルを振りかけたような話です。それを出だしでつまづき、途中で転び、八回も冒頭から書き直した挙句ついに完成できませんでした。気がつけばわたしは大学を卒業していました。まさに才能がなかったとしか言いようがない。しつこさと根性だけはあつたようです。

それでも懲りずに次に『あらんとするもの』という小説を着想しました。「在るということ望むもの」という意味で題にしたのですが、ずいぶんダサイ題ですねえ。後に『至高の者』と改めましたが、これとてたいした題ではありません。卒業した翌年、即ち昭和四十八年（一九七三）の三月ことです。わたしは電気屋の修行のため神戸の電気店で働いていました。創作ノートは十三冊目になっており、

「3月7日より『あらんとするもの』執筆開始」と書かれていました。ところがこれがまたとんでもない作品でした。まずあらすじがない、固有名詞をいっさい使用しない、そして三百枚の作品にいっさい改行がない、およそ小説とはいえない代物でした。場所も時間も分らない闇のなかで、自らの名前も分ならず、私という自我を頼りに語り続けることによって、自らの存在の証明に立ち向かう姿を描写しようとしたものでした。仕上がるのに五年かかりました。今になって思うのですが、この時に短編小説などを書く練習をしておけば良かったのですねえ。わたしは実家に帰って電気店の仕事をしながら小説を書いていました。この時すでに結婚して子供が生まれていました。しかし、発表するあてはありませんでした。後に筒井康隆に「わが国の文学水準を十年は跳び越えている」と激賞されましたが、わが国にこの作品を評価できる土壌はなく、何でもいから賞を取ってからでないと思向きもされないと忠告されました。適切な助言です。わたしは何度か新人賞に応募しましたが、一次選考さえ通りませんでした。以後二十年間、「見果てぬ夢」を発表するまで筆を取りませんでした。

ここまでがわたしの小説作法の前半ですが、ここで「書く」ということについて話したいと思います。わたしたちはいつごろから文章を書くようになったのでしょうか。わたしの場合は小学生のときの作文です。夏休みの日記もありました。字もまともに書けないのに作文を書かされた。一番古い記憶は小学二年生のときです。母が下書きしたものを写しました。それが傑作で、母は大正生まれなものですから、「きょう」という言葉を「けふ」と書くのです。それをまるまる写したのだから、小学二年生の日記に「けふはぼくは朝から・・・」と書いているわけです。写したのがバレバレですね。その後先生からは「思ったままを書きましょう」なんてことを言われました。思ったことをそのまま書けるならだれも苦労はしません。作文なんて大嫌いでした。じつさい小学校で作文の書き方を教えてもらった人はいるでしょうか。原稿用紙の書き方などは習っています。「ここはこういうふうにかくの

よ」などと、簡単な添削は受けたかもしれないけれど、テクニクなどを教えてもらったことはありません。例えば美術などはどうでしょう。デッサンをします。或いは写生をします。詳しく話す余裕はありませんが、そういうことをしてテクニク、技術を身につけるのです。これを作文でやったらどうでしょうか。まずテーブルの上に水を入れたガラスコップを置く。そして生徒はそれを囲んで座り、コップについて書く。見たままにコップの形、色、影などとともに透明感、立体感など空間的な要素を描く。水との色合い、屈折の違いなども。また自分の記憶にある他のコップとの比較、或いはコップについての思い出等々を書く。先生はそれらを主導し、文章を評価し、添削する。これが「見たままに書く」練習なのです。「思ったことを書く」練習もしなくてはなりません。それらをせずに文章を書かせるのは、自動車教習所で行きなり車を運転させるようなものでしょう。ここで文章に関して自動車教習所のようなものを紹介します。教習所というのは例えですけどね、いわゆる文章読本です。わたしもかなり読みました。谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫、丸谷才一、変わったところでは小関智弘の『働きながら書く人の 文章読本』というのもありました。でもね、こんな本を読んだからといって文章が書けるようになればだれも苦労はしません。結論から言えば文章を書く（書ける）ようになってから参考として読んだら、「なるほどそうなのか」と分かるようになるのです。文章を書くためには、本や教科書を読んで習うよりも、まず書き始めることが大事です。でも世の中権威に弱い人というか、ものごとを基礎から始めねば気が済まない人が実に多いのです。或いは誰か先生に教えてもらわねばならないと考えている人が多い。例えば「源氏物語」を勉強したいと思っている人がいるとします。いまNHKの大河ドラマで『光る君へ』をやっていますね。その他の番組でも「源氏」は取り上げられて今やブームになっています。だから「源氏」を勉強したい人も多いと思います。どこかで教えて欲しい。姫路文学館でも講座があります。勉強したい、行きたい。そう言う人にわたしはまず「源氏」を読んだらどうですか、と言うのです。いやいや大それた、「源氏」など

とても読めません、と言うのです。わたしは何も「源氏物語」を原文で読めと言っているのではないのです。ここではつきりと言っておきます。「源氏物語」を原文で読む必要はまったくありません。原文で読むのは研究者、大学の先生、専攻している学生たちです。素人が手を出すものではありません。おそろしい。わたしは現代語訳を薦めているのです。或いは漫画でもよい。大和和紀の『あさきゆめみし』がよろしい。現代語訳は与謝野晶子、谷崎潤一郎、瀬戸内寂聴、田辺聖子、角田光代、などが有名ですが、わたしは寂聴をお薦めします。寂聴訳は少し長く、文庫で十巻あります。それに引きかえ谷崎訳は五巻で短い。どう違うかと言うと、谷崎訳は原文をそのまま美しい現代語に訳しています。しかし原文同様省略が多くて少し難しい。それに引きかえ寂聴訳は丁寧に行間まで訳しています。要するに行間を説明しているのです。だから分かりやすく読みやすい。まあ、いずれの訳でもいいから一度は読んでみてください。日本が世界に誇る最古の大長編小説の名作ですから。

「そういうお前さんは読んだのかい？」と言う声が前の方から聞こえてきます。もちろん読みました、それも二回半読みました。「半」とはややこしい言い方ですね。まるで途中で挫折したみたいで、でも違うのです。事情を話せば、円地文子に十巻の「源氏」の現代語訳があります。ところが彼女には（わたしの古典シリーズ）という三巻の抄訳があります。わたしはそれを読んで「半分読んだ」と称しているのです。だから谷崎と寂聴と円地文子の省略版を読んで、二回半読んだとうそぶいているのです。

文章を書くにあたってもう一つ大事なことは、いわゆる名文を学ぶことです。「石炭をば早や積み果てつ。」これは森鷗外の『舞姫』の冒頭です。わたしはこの文章がたいへん好きです。「中等室の卓（つくえ）のほとりはいと静にて、熾熱（しねつ）燈（とう）の光の晴れがましきも徒（いたずら）なり。」と続きます。その他詩や和歌・短歌、俳句などを暗唱するのも良いでしょう。

「名文を学ぶなんていきなり言われても、それほど本を読んでいないし・・・」などと言われる方に

はとっておきの本があります。齊藤孝（明治大学教授）の『声に出して読みたい日本語』（草思社）です。この本にはどこかで聞いたことがある文章が詰まっています。例えば冒頭は、「知らざあ言つて聞かせやしよう」歌舞伎の「白波五人男」の弁天小僧菊之助のせりふです。また、「まだあげ初めし前髪の」島崎藤村の「初恋」です。

「せり ならずな ごぎよう はこべら ほとけのぎ （すずな すずしろ）」と「春の七草」も入っています。こういった文章を毎日一ページずつ音読してみてもどうでしょうか。毎日が楽しくて豊かになります、たぶん……。音読が出たついでに暗唱の話をしましょう。暗唱とは書いてある文章を頭に記憶し、それを見ないで文章を声に出して唱えることです。いわゆる暗記です。暗記というと嫌がる人がいますが、試験勉強をする暗記とは性質が違います。試験前に予想した問題の答えを敵のように暗記して、試験が終わればコロリと忘れる。器用なアタマの持ち主がいました。でもここでいう暗唱はむかし江戸時代に行われた方法です。素読と言います。『論語』などを解釈せずにただ読むことだけを繰り返し、暗唱できるようにするのです。

子日ク、学ンデ時ニ之ヲ習フ、亦（また）説（よろこ）バシカラズヤ。
朋（とも）有り、遠方ヨリ来タル、亦（また）楽シカラズヤ。

『論語』の「学而第一」で高校の漢文の教科書で習いました。江戸時代には七歳くらいから寺子屋に通って、意味も分からぬままに暗唱したのです。わたしが聞いた話では湯川秀樹、あの日本人で初めてノーベル賞をもらった物理学者ですが、幼い時に祖父から素読の指導を受けていました。兄の貝塚茂樹、弟の小川環樹も一緒だったと思います。湯川秀樹は自伝『旅人』の中で、「漢籍の素読を決して無駄だったとは思わない。…大人の書物をよみ出す時に文字に対する抵抗がなかった。漢字に慣れ

ていたからで、：祖父の声につれて復唱するだけで、：漢字に親しみ、その後の読書を容易にしてくれた」と言っています。単なる暗記ではなく、暗唱というのが非常に大事だとわたしも思うのです。最近では脳科学の方でも、暗唱は脳の活性化に役立つと言われています。以上雑多な話になりましたが、わたしの読書に関するおおよその話をさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。

アルベール・カミュの『異邦人』との出会いはわたしの文学を決定づけたといえるでしょう。

きよう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かもしれない、私にはわからない。(窪田啓作訳)

「物憂げ」とか「退屈」などという言葉では言い表せないフランス語の「アンニユイ (ennui)」な状態から引き込まれる「不条理」の世界を何度も読み返し、自らの周囲に不条理性を認識していったのです。カミュの作品は「新潮世界文学」の「カミュI・II」でほとんど読みました。そして、さらにドストエーフスキイ、フランツ・カフカ、埴谷雄高と読み進んだのです。河出書房新社から米川正夫個人全訳の「ドストエーフスキイ全集」、新潮社から「カフカ全集」、また河出から「埴谷雄高著作集」が始め、わたしは文学の世界に深く沈潜しました。カミュとカフカはわたしの文学の方向を決定したのでした。先にわたしは学生時代に六百冊読んだと言いましたが、数えていたのかと言われるとそうではありません。残念なことに読書メモすら取っていませんでした。簡単に話せば、わたしが下宿を引き払って実家に帰ったとき、五百冊余りの本を持ち帰ったのです。行くときは一冊も持って行かなかった。ゆえにそれらはすべてわたしが学生時代に買い求めて読んだ本でした。それに加えて、友人知己たちから借りて読んだ本もかなりありますので、おおざっぱに言って六百冊読んだと言っているのです。

わたしは小説を書くために本を読んだのですが、どんなものを書いていたかという、これがまたお

粗末限りないものでした。数学や理科は得意でしたが、国語はまったく苦手な生徒でした。作文や読書感想文を書けと言われると憂鬱で、宿題が出来ずに登校拒否まがいのことをしました。ところが恋とは恐ろしいもので、そんな人間に小説を書こうとさせたのでした。

わたしは高校三年の三学期に三十通ほどの手紙を書きました。受験勉強を終えた深夜に、ガールフレンドに訥々とした手紙を書いたのです。どんなことを書いたのか今となっては思い出せませんが、彼女が手紙を処分してくれていることを願います。そして、じつさいに残っているのは四十四冊の「創作ノート」です。その中から表紙にNo.1と書かれたノートの最初のページの冒頭部を引用します。大学一年の五月ごろに書いた文章です。

僕が親友からの手紙を公表する動機となったのは、僕が彼の恋愛論に全く共鳴するあまり、彼のそれが誰に知られる事もなく埋もれてしまうのを怖れた為である。

「偽りの恋 ―親友からの手紙―」という題で、恋愛論を目論んでいたのです。次にNo.4から。

英雄――君に情熱を教えよう。昨年冬、現実のいやな生活から抜け出すために、僕は海へ行った。猛り狂う冬の海。突堤の先で、海から吹き寄せる風に息も絶え絶えに立っていると、荒波が僕のコートを洗っていった。波は海のコ―そして、僕の心。

「英雄」という呼びかけは、『地の糧』の「ナタナエル」という呼びかけを真似たものです。「ナタナエル」という呼びかけがリフレインのように現れて非常に効果的でした。今思えば「英雄」より、もっと効果的な名前を探せば良かったのですが、そこまでアタマが回りませんでした。約半年後の十

月ごろの文章です。文章に対する作者の立ち位置が変わっています。このついでに最近の文章を紹介します。『種の記憶』から「見果てぬ夢」の冒頭部です。

「ハンザギじゃないか！」思わず叫んでしまってから、ぼくは慌てて周囲を窺うようにそっと見まわした。薄暗い通路には幸いだけれもないなかった。一瞬の緊張のあと、やれやれと安堵の息をついて、通路の反対側のベンチに腰をかけた。

平成十八年（二〇〇六）同人誌「播火」六十一号に掲載された最初の作品で、言い換えれば初めて活字になった文章です。先の作品からはおよそ四十年が経過しています。

さて、わたしは『異邦人』を読むことによって、この世界の「不条理」を認識しました。日常生活の中で、例えば大学からの帰り、夕刻の中央線鶴舞駅のプラットホームで電車を待つ群衆の中で、或いは退屈な微積分学の授業中に、様々な姿態の学生の中で感じる疎外感、また深夜の下宿の蒲団の中から見つめた常夜灯の光に浮かぶ天井の形の異空間性、これら日常のすぐ隣にある不可思議な感覚、そういったものに気づいたのでした。また、深夜に布団の中で、眼を瞑って想像力を拡張、遠くへ広がる宇宙空間を想像し、そこに自らの存在を認識しようとしたが点としても認識できない存在であることを知りました。『異邦人』の最後のページはわたしに深い感動を与えました。主人公ムルソーは犯罪の動機を尋ねられ、「それは太陽のせいだ」と答え、失笑されます。弁護士の弁論もむなしく、裁判は自らが存在しないかのように進行し、彼は参加を許されていないと感じました。結果は死刑。彼は司祭の面会を拒絶し、自らの死を受容していったのです。

何人（なんびと）といえども、ママンのことを泣く権利はない。そして、私もまた、全く生きかえった

ような思いがしている。あの大きな憤怒が、私の罪を洗い清め、希望をすべて空(から)にしてしまつたかのように、このしるし(・・・)と星々に満ちた夜を前にして、私ははじめて、世界の優しい無関心に、心をひらいた。

母親の死に涙を流し、通夜では煙草やミルクコーヒを控え、埋葬の翌日は遊興を慎むのが社会通念であり、人々はそれに従つてその振りをする。ムルソーにとつて、心にもないそれらの行為は嫌悪すべきで、また人を愛することは無意味であつたのです。裁判はムルソーの反社会性を罰し、死刑を宣告したのでした。カミュは世界のこの社会的不条理を描いたのでした。

そして、ここまで来れば、カフカが描いた不条理の世界はもう隣りにありました。ある朝突然虫になつてしまつた主人公に、昨日と変わらぬ家族の日常が続く世界(『変身』)、ある朝突然逮捕され、日常の仕事しながら身に覚えのない罪で裁判にかけられて処刑される(『審判』)、また城に雇われた測量士がいつまでもたつても城の中へ入れずに翻弄される物語(『城』)、さらに『掟の門』。カフカはわたしたちの日常に潜む不条理を隠喩として提示したのでした。

ひるがえつて、ドストエーフスキイの作品はわたしに読書力、言い換えれば読む力を与えたと思ひます。本を読み始めた大学一年の夏休み前にわたしは河出のグリーン版で『罪と罰』を読み始めました。ところがあらすじをさえぎる独特の長広舌もさることながら、ロシア人の名前に挫折したのです。ロシアの小説を読む難しさは登場人物の名前の表記にあります。フルネームは名前・父称・姓で表記され、父称とは父親の名前に基づく名前です。例えば『罪と罰』の主人公の名前はロジオン・ロマージュイチ・ラスコーリニコフ、愛称はロージャヤです。この場合父称はロマージュイチで父の名前はロマージュイチ・ラスコーリニコフ、愛称はロージャヤです。この場合父称はロマージュイチで父の名前はロマージュイチ・ラスコーリニコフ、愛称はロージャヤです。またラスコーリニコフの妹はアヴドゥーチヤ・ロマージュイチ・ラスコーリニコヴァです。名前は男性形と女性形があるので、ロマージュイチの娘でロマージュイチ・ラスコーリニコヴァとなります。愛称はドゥーニヤで、ドゥーネチカと呼ばれ

ることもある。そして、名前の呼び方で相手との親密度が分かります。彼女の場合、公式にはアヴド
ウーチャ・ロマーノヴァ、友達からはドゥーニャ、家族からはドゥーネチカと呼ばれるのが一般です。
こういうことが分かってくると、『罪と罰』は俄然面白い小説になってきます。大学二年の五月から、
『ドストエーフスキイ全集・米川正夫個人全訳』（全二〇巻・別巻一卷）が河出書房新社から出版さ
れ、第一回配本『罪と罰』から読み始め、最後の『別巻・ドストエーフスキイ研究』（贈呈本）まで
全巻読みました。世界の文学全集を幅広く読むのが一般ですが、一人の作家の作品を全部読むことも
読書の醍醐味です。

わたしは不条理をテーマにすることによって、読む本の道筋がおおむね決まったように思います。カ
ミュ、ドストエーフスキイ、カフカと読んで、わが国の埴谷雄高に到りました。

埴谷雄高（一九〇九〜一九九七）は台湾で生まれ、日大予科に入学しましたが一九三〇年日大を退学
しました。日本共産党に入党するも逮捕され、豊多摩刑務所で未決囚として拘留されました。その独
房でカントの『純粹理性批判』を読み終生影響されたといいます。一九四六年に荒正人、本田秋五ら
と雑誌『近代文学』を創刊し、畢生の大作『死霊』の連載を開始しました。

私が埴谷雄高（一九〇九〜一九九七年）と出会ったのは、大学二年の時（一九六九年）に読んだ平凡
社の「現代人の思想」シリーズ『実存と虚無』に収録された作品でした。そこには「存在と非在との
つべらぼう」「夢について」が収録されており、他にはハイデッガーやサルトル、カミュやカフカの
作品が掲載されていました。またモリス・ブランショとジュールジュ・バタイユ（ともにフランスの
哲学者、作家）は初めて知る名前でした。こういうアンソロジーには新しい作家との出会いがあるか
ら楽しみです。後年ブランショの本を買い集め、またバタイユの著作集を贖いました。この『実存と
虚無』に掲載された埴谷雄高の作品は、ハイデッガーら他の作家と同様に晦渋で辟易としました。そ
して、この本の最後に参考文献が紹介されており、埴谷雄高の項には『垂鉛と弾機』『不合理ゆえに

吾信ず』『虚空』が載っていました。また未完の長編小説『死霊』があると知りましたが、当時これらはとても手に入りませんでした。特に『死霊』は三度出版したけれども、出版した三社は皆倒産したといういわくまでついていて、埴谷雄高は難解でおぞましいというイメージがありました。

またその他にNHKブックスから埴谷雄高の『ドストエフスキー―その生涯と作品―』が増刷され、私は跳びついて読みました。そしてこの本に書いてあった「文学者はつねにその前代の文学書を読むことによつてのみ文学者になる」という文章に感銘し、終生座右の銘にしています。工業大学に在籍して、教えを乞う師もなく、またともに文学を語る友もなく、深夜に独りで文学に励む者にとつてたいへん勇気づけられた言葉でした。私は意を強くして古今東西の文学書を読みふけたのでした。

慌てて本箱を三つ集めました。

創作ノートの抜粋 内面の変化 記述の変化

*大阪の旭屋へ本を探しに行つて、そこでまた新しい本を見つける

これまでは一冊の本をとりあげ、その本の内容について、或いは作者について話してきましたが、今回は趣向を変えて、本の読み方について



LingvoオクトM+ 電子版

ご希望の方は下記のQR コード
をダウンロードして電子版を送
れと明記の上通信ください。
無料でお送りします。

